慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マーカンチリズム時代の人口学説
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.11 (1931. 11) ,p.1557(1)- 1607(51)
JaLC DOI	10.14991/001.19311101-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19311101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十一月號

三田文學

貝殼追放（父さなる記）　水上瀧太郎
「光明の世界」は在存するであらふか　日野巖
文壇と文學　平松幹夫
江戸期作家の確執　塚本楢良
十月の作品（文藝時評）　太田咲太郎
滿洲事件に即して（社會時評）　原賞
近頃見た映畫（映畫時評）　加茂鳥二
「新東京」の解散について（演劇時評）　八住利雄
秋期慶早庭球試合記　樋口佳雄

創作

時（小說）　淺尾早苗
侵入者（戲曲）　三宮孝一郎
不幸（小說）　今川英
無賴の街（小說）　小川重夫
仲間はづれ（戲曲グリーン）　菅原卓譯
煙（中篇小說）　矢崎千春
消息　富澤有爲男
六號雜記　佐伯米子
編輯後記
表紙
カット

發賣所　丸之內時事ビルヂ　友善堂　定價金五拾錢

三田學會雜誌　第二十五卷　第十一號

マーカンチリズム時代の人口學說

高橋誠一郎

一

吾人は廣義に於けるマーカンチリズム（mercantilism）若しくはマーカンタイル・システム（mercantile system）なる名辭を以つて、中世的政治經濟組織の崩壞、加特力教經濟理論の衰頽より、佛のフィジョクラァト學派（Physiocrates）及び蘇のアダム・スミス（Adam Smith）等によりて代表せらるゝ個人的自由主義の經濟學が大體に於いて勝利を占むるに至る迄の、初期資本主義の時代、集權的民族國家發達の時代に於け

る歐洲諸國の經濟思想並びに經濟政策を指稱せんとす。所謂マーカンチリズムの時代は凡そ三百年間に亙れるものにして、そは又其の間に於けるあらゆる歐羅巴諸國の思想を着色せり。此の時代に於いて經濟學に特有なる見地は、之れが前時代に於いて從屬し來りたる他の諸學即ち神學及び倫理學より次第に分離するに至れりと雖も、而も未だ斯學全體に關する何等完全なる系統的論述を期待すると能はず。幾多の理論及び學說は猶ほ概して其の根本的原則との關係に誘致せらるゝことなく、單に特殊緊急の必要によりて喚起せられ、又は時代の變動より發生せる實際問題と關聯せる脈絡なきモノグラフの集合及び時々の法令並びに議事錄中に表明せられたり。而して吾人はマーカンチリズムを以つて個人的自由主義の經濟學が大體に於いて勝利を占むるに至る迄の初期資本主義の時代、近世民族的國家發達の時代に於ける經濟思想及び政策と看做すと雖も、而もマーカンチリスト流の政策は自由主義が勝利を得たる後に於いても全然終熄せるものに非ず。吾人は一定限界內に於いて經濟的國際主義に向つて進まんとするの傾向を認むると同時に、舊マーカンチリズムの第十九世紀に於ける後裔たる保護政策よりして一の新たなるマーカンチリズムの發生を見るなり。此の新たなるマーカンチリズムは一方に於いては次第に發達しつゝある世界經濟の諸條件よりして其の特性の多くを誘導すると共に、他方に於いては之れと背馳し、歐洲大戰を誘起せる國際的軋轢に對して多大の責めを負ふ可きものなり。（J. W. Horrocks, A Short History of Mercantilism, 1925, pp. 7-8.）。洵にマーカンチリスト流の政策及び思想は全然過去のものと化し去れるに非ずして、猶ほ吾人と共に存するものとも稱するを得可し。

マーカンタイル・システムの目的とする所は、中央の主權によりて行はるゝ奬勵若しくは制限に由り、私的及び部分的利益をして國民的强大及び獨立を助成す可き共同の利益と一致せしむ可き組織的商工國の建設に在り。而して所謂マーカンチリズムの學說及び理論（mercantilist doctrine and theory）なるものは、固と此の時代に於ける實際的活動の理論的方面に過ぎず。而して國家及び國民は何等科學的思想の形態に依ることなく、寧ろ外部的事情の勢力と表面的事實の觀察とに依りて之れに導かれたるものなり。即ちマーカンチリズムは元來一個の經濟學說

として現れたるものに非ずして、中世以來の地方的經濟政策を中央集權的なる近世的國家自ら繼承し、其の繁榮策を講ずるに當り、時宜に應じて發生したるものにして、先づ國内に金銀財寶を充實せしむるに努め、殊に對外商業及び工業を偏重し、國内一般の産業に對して徹底せる國家的保護干渉を行はんとする實際政策なり。而してマーカンチリズムの理論は富國强兵の因を個人の殷富と盛大なる商工業とに求めんとするものなり。そは實にブールヂュワ階級及び動産資本に對して有利にして、貴族及び領主に對して不利なる政治的專制主義の體系なり。(Dr. Othmar Spann, Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre auf lehrgeschichtlicher Grundlage mit einem Anhang: Wie studiert man Volkswirtschaftslehre? 1925, S. 5.)。

而して階級的意識が新興ブールヂュワジーの間に發達し來り、階級的利害が彼れ等によりて認識せらるゝに至れる時、彼れ等は先づ自己の力に依りて自己の問題を解決せんとせり。商工業を蔑視せる過去に於ける偉大なる思想家の言説は概して彼れ等を援護し、彼れ等の利益に資するものに非ず。封建階級に對して自己の權利を擁護するが爲めに、長き戰を鬪はざるを得ざりし町人、數世紀間に貴族及び國王の專恣なる意思に對して人格上及び財産上の諸權利を確保す可き施設を創始し確立せる町人階級は又其の當面焦眉の諸問題に關して自己の立場を辯護せざるを得ざりき。吾人は斯くの如きブールヂュワ的利害、殊に當時に於ける代表的ブールヂュワたる商人階級的利害、並びに特殊商人の關與せる業務上の利害の見地より主張せられたる理論を稱して、前記廣義に於けるマーカンチリズムに對して狹義に於けるマーカンチリズムと呼ぶ。元來、商人及び商人によりて行はるゝ商取引に關する mercantile なる語より出でたるマーカンタイル・システム若しくはマーカンチリズムなる名稱は決して能く廣義のマーカンチリズムを指示するものに非ず。(クッドラー (Josef Kudler) は das Merkantil-oder kaufmännischen System の語を用ふ。Die Grundlehren der Volkswirtschaft, 1845, I. 9.)。そは唯だ國家が恰も資本主義的企業家のみを以つて構成せらるゝが如くに觀るが故に斯く稱し得るなり。而も此の名稱は狹義に於けるマーカンチリズムに對して最も能く其の適用を見るなり。而して是れこそ實に本然の意義に於けるマーカンチリズムなり。

二

所謂マーカンチリズムの時代は幾多の方面に於ける急速なる發達、激甚なる變化の時代なり。就中、先づ注意す可きものは政治的發達と變化なり。封建的貴族及び僧侶の政治的重要性は次第に減少して、國王と庶民との共れは增大しつゝありき。西歐に於ける封建制度は、羅馬帝國亡び、民族的諸王國未だ興らず、人民は殘忍なる掠奪者の前に戰慄きつゝありし時代に發生せるものなり。そは第九世紀及び第十世紀を通じて、異教に對する信仰と基督教に對する背信の濁浪の底に基督教國の沈溺するを救濟する偉大なる事業を遂行せり。封建制度は此の時代の終末までに其の任務を完了せりと雖も、而も之れと共に直ちに消滅し去ることなく、封建の貴族は其の權力に執着し、其の特權を固守し、新興階級の發展を嫌惡せり。洵に西紀一千年より一千五百年に至る中世後期に於ける社會史上の主要なる特色の一は、ブールヂュア階級が漸次發達興起して確實に地方の勳爵士及び男爵階級に取つて代るに至れるの事實に存す。ブールヂュア階級の强味は主として財囊の力に存し、其の代理者は英國庶民院の如き代議的集會にして、其の同盟者、助力者は新たに勢力を得つゝある民族的國王なり。封建的貴族階級は十字軍及び自殺的內亂によつて凋落せり。豪商等は委棄せられたる封土を買收し、農業の方法を劇變せしめ、共有地を圍繞し、不利なる耕作地を有利なる牧場に轉換し、中世基督教國の傳統的村落經濟を改變せり。(The Social & Political Ideas of Some Great Thinkers of the Sixteenth and Seventeenth Centuries, ed. by F. J. C. Hearnshaw, 1926, pp. 29-30.)。

中世の歐洲は其の農業的封建的性質に於いて、其の人口の寡少にして交通機關の不備なる點に於いて、又其の好戰的精神に於いて、同時代に於ける世界の他の部分と類似するものなり。然れども中世の歐羅巴は、羅馬加特力教の集中力統一力を以つて結合せられたり。而して其の結果は理論上に於いて、又或る點までは實際上に於いても、超國民的なる世界的宗教政治の形成を爲りて現れたり。而して此の世界的基督教國と封建的貴族及び僧侶の間に介在せる中世の君主は多く無力微弱にして、概して彼れ等の領土は狹く、其の收入は薄く、其の威嚴に至りては就中尠小なりしなり。彼れ等は彼れ等と同等なりと揚言せる同輩によりて選出せられ、獨立の權威を行使せる法廷及び會議によりて制限を受け、憲法上の宣誓と封建的義務とによりて拘束せられ、懺悔聽聞僧によりて附き纏はれ、僧正等によりて

注意深く監視せられ、法王の使節によりて臨檢せられ、而して己むを得ざる場合には法王によりて破門せられたる primi inter pares（同等のものゝ間に於ける第一のもの）に過ぎざりしなり。然れども文藝復興の曙光の差し初めたる時、彼れ等の運命は改善の徴を示せり。(ibid., p. 28.)。歐洲諸國民が次第に緊密なる結合を來して、民族的國家を形成し、其の經濟的發達の歩を進むるに連れて、中世の世界的統一及び教會國家の理想は最早不可能と爲れり。産業の發達、通商の進歩、中層階級の興起、都市の增大は無法なる領主と苛酷なる僧侶に對する國王の鬪爭に於いて彼れ等に自然の同盟者を與へたり。而して政治學說上より觀れば、復活せる羅馬法の研究が、君主の獨裁政治を通じて人民の主權が發現す可き政體、即ち貴族は何等の價値を有することなく、僧侶は君主の意志の代理者に過ぎざる政體を啓示すると共に、他方に於いて、新約聖書の讀誦と原始基督教の再發見とは、神自身によりて任命せられたる有司に對するものとして國王及び長官に對して服從の義務あることを示したり。斯くて早く既に第十四世紀の交に於いて國王神權說は主張せられ初めたり。(ibid.)。

「宗教改革の曉星」ジョン・ウイクリフ(John Wyclif)の理想は民族的國家と之れに從屬せる國民的教會なりき。彼れは聖アウグスチヌス(Aurelius Augustinus)及び一般諸教父と共に、人間の墮落が國家の設置を必要ならしめたりと說く。彼れは聖パウロがネロの權威を尊重せるが如く、縱令ひ、背德なる暴君の權威たりと雖も、之れを尊重するを以つて基督教徒の義務なりと主張す。「人各々上に立てる諸權に服す可し。蓋し權力にして神より出でざるものはなく、現存する所の權力は神によりて定められたるものなればなり。故に權力に逆ふ者は神の定に逆ひ、逆ふ人々は己れに罪を得」(「羅馬書」第十三章第一、二節)。神法の支配下に於ける無辜の狀態に於いては、かの「士師記」中に描寫せられたるが如き貴族政、即ち神政が理想的のものたる可きも、而も罪業深き現實の世界に於いては、强大なる王政を必要とす。ウイクリフは、國王を以つて、僧侶、教會財産及び教會法廷の上に至上權を有するものと觀る。教會は基督の人間性を表示するに過ぎざるも、國家は其の神性を表示す。國王は神の名代として其の人民を統治するものにして、僧正は彼れ等の享有し得る總べての權威を悉く國王を通じ、又國王を通じてのみ受くるものなり。ウイク

リフは、國家を以つて、現世的若しくは靈的の何れを問はず、一切の事項に關して權力を有する全能のものと主張す。彼れの心意は司祭の權威に關するあらゆる主張に對して本能的に反撥す。而してニコラウス・クザヌス（Nikolaus Cusanus）に據れば、國家は行爲の一致を通じて個人の任意的服從によつて確立せらるゝものなり。君主は人民の集合的意志を代表するものなり。彼れは法王が皇帝に聖ペテロの現世的遺產を返還し、俗界權威の有力なる保護の下に敎會を置かんことを主張せり。

三

國民を以つて單位とせる現世的國家は生誕して、世界的基督敎國は解離せり。而してシャール八世の伊太利亞侵入後に及んで歐洲諸國民間に於ける勢力の均衡を維持せんとする鬪爭は開始せられたり。敎會の支配權より自己を釋放し、或る程度まで種々なる宗敎團體を國家的ならしめたる自主的國家の近代的政治組織は發生せり。而して世界の端まで進軍し、乾坤の全部を歐洲の支配下に屈服せしめ、之れを以つて其の植民地たらしむるの運命を開けるものは、實に此の國際的競爭の世界なりき。而して資本の蓄積と通商の擴張とは又、王の權力のみが能く與ふるを得可き平和と安固と法の劃一とを要求せり。加之、そは又中央政府の封建的軍務に對する依賴より之れを救へる國民的課稅の制度を可能ならしめたり。（Raymond G. Gettell, History of Political Thought, 1924, p. 128.）。斯くて傭兵は封建的騎士に代り、有給の職業的官吏によりて行はるゝ行政事務は封建的自治の制度に代れり。而して鞏固なる國民的統一を達成せる佛蘭西、西班牙、葡萄牙及び英吉利は確然たる實在と爲り、單なる地理的表現たらざるに至れり。國王は其の重き失費に應ずるが爲めには到底王領の收入を以つて足るものに非ず、前代に於いては一時的に國王の私收入を補足するに過ぎざりし課稅は必然正規的と爲り、永續的と化し、而して國王の所要と共に增加せざるを得ざるに至れり。而して新大陸よりする貴金屬の急激なる流入は自然經濟の基礎を覆して貨幣經濟に移らしむるに資せり。課稅は自然經濟の下に在りては決して容易の業に非ず、而も貨幣經濟が徹底し、有效に行はるゝに及んで課稅の可能性は著しく大と爲らざるを得ず。國王の收支は共に貨幣の名辭に於いて考量せられて、國務の處理は商人の業務に

類似すること大と爲れり。(Alexander Gray, The Development of Economic Doctrine. An Introductory Survey, 1931, p. 71.)。

かの A Discourse of the Common Weal of this Realm of England. の著者が租稅に依りて國家を支持するの財政策を採り、而して此の著の紙端に其の主張を要約して「國王は其の臣民が何等の財寶をも有せざるの時、財寶を有すること能はざる所以」と書せるは實に租稅の哲理を道破せるものなり。(ibid., ed. from the MSS by Elizabeth Lamond, 1893, p. 35.)。而して國家の收入は其の人民に依賴する所大なるの事實明かと爲りて、爰に當時の「經濟學」は主として國民的發達によりて人民を富强ならしむるの術と思惟せらるゝに至れるなり。

佛王アンリー四世の勅令に曰く「國王の力と富とは臣民の數と富裕とに存す」と。國王の財源、國富の標準たるものは實に繁忙勤勉なる人民に存すと觀ぜられたり。アントワン・ヅ・モンクレチアン (Antoine de Montchrétien) は國王ルイ十三世及び其の母マリー・ヅ・メディチ (Marie de Medici) に獻じたる Traicté de l'Œconomie Politique, 1615. に於いて、人は不斷の活動と作業に於いて生活するが爲めに生る」と做し、默想と隱遁の生涯は活動によりて醱酵せしめらるゝに非ざれば、不完全にして、恐らく國家に取りて有用なるよりも有害なる可しと說き、國家の政策は人口の如何なる部分をも懶惰の狀態を持續するを許さざるに在りと主張せり。(Traicté de l'Œconomie Politique, avec Introduction et Notes par Th. Funck-Brentano, 1889, p. 21, 22.)。エヴの犯せる遠き昔の罪過の結果として勞働は繼承の權利によりて吾人の上に課せられたり。斯くて人生と勞働とは不可分的に結合せしめられたり。無爲の狀態に在らしめらるゝ人々は容易に不善を爲すに至らしめらる可く、怠惰は男子の元氣を損ね、女子の貞操を傷ふ。(ibid., p. 65.)。懶惰は富裕にして繁榮なる諸國家に取り致命的の疫病なり。そは一切諸惡の母、萬罪の原因なり。(ibid., p. 74, 101.)。佛蘭西は不幸にして此の懶惰の惡疫に感染せり。公共は須らく私利をして公益と結合する諸職業及び諸企業に人々を使傭することを念とせざる可らず。眞に施政の問題を理解せる者は苛酷なる刑罰によつて强盜及び窃盜を撲滅する者に非ずして、彼れが其の管理に委せられたる者に對して與ふる業務によりて彼れ等が强盜及び窃盜と爲るを防止する者なり。斯の如きは、佛蘭西の各州内に其の地方に適する

所に從つて種々なる製造業に對し數個の相異れる仕事場を設立するによつて確保せらるゝを得るなり。而して是れ等のものは國家の爲めに大なる富を創造す可き工匠に取り好個の養成所を形成す可きこと疑ひなかる可し。而してそは無數の處刑用車輪及び絞架をして無用に歸せしむ可きことも亦疑ひなかる可し。(ibid., p. 27.)。モンクレチアンは又軍事上大人口の有利なる所以を國王に指摘することを怠らざりき。(ibid., p. 275.)。(Charles Woolsey Cole, French Mercantist Doctrines before Colbert, 1931, pp. 118-120.)。

凡そ同樣の思想が同じく第十七世紀の英國を支配せること、吾人が曾つて「近世初期の失業對策と就業權論」中に述べたるが如し。(「三田學會雜誌」第二十五卷第一號)。

這個軍事上及び財政上の目的より强健にして勤勉なる大人口を熱望せる國王の欲求は、低廉なる貧民の勞働を利用し、國產を發達せしめ、輸出を增加し、輸入を抑制し、金銀の流入を誘致し、貨幣の增加によつて諸物價の騰貴を來し、一般的好景氣を現出せしめんとする商人流の見地と一致するものなり。多數のマーカンチリストに取りては國家收入及び國家的利益の問題は其の直接の關心事に非ず、固より彼れ等は必ずしも國王に對する忠節の念薄く、愛國の至誠に於いて缺くる所あるものに非ず、又其の建策が國家の富强繁榮に資することを信ぜざりしに非ずと雖も、彼れ等が當時の經濟問題を論ずるに當りて先づ彼れ等の念頭に上りしものは、眞の國民的利益に非ずして、彼れ等自身の關與せる業務上の利益なりしことは吾人の曾つて言へるが如し。(「三田學會雜誌」第二十四卷第五號所載拙稿「マーカンチリズムの重金思想に就いて」參照)。彼れ等は利潤に對するあらゆる機會を逸せざらんとせり。彼れ等の第一に期する所のものは、總べての人を以つて悉く皆、勞作するの義務を有するものと看做し、天下に無用の懶民なからしめて、其の勞働を利用せんとするに存せり。斯くてマーカンチリストは一國の人口、殊に手工の數を增加するに努め、之れを歸化法、異教寬恕、貧民の救助及び使役、子女の職業教育等に由りて成就し得可きものと做せり。

四

斯くの如き時代の思潮は早く一國の人口現象を以つて科學的研究の對象たら

しめんとする傾向を誘發せり。恐らく人口問題は、あらゆる經濟問題の中に在りて、單なる政策論の範圍に止まることなく、進んで實證的研究の題材たらんとするの傾向を有したる最初のものゝ一なる可し。

夙に、一般マーカンチリストと等しく人口增加の利益を主張すると共に、更らに深く人口問題の眞相を究めて、後にマルサスの法則として知らるゝに至れる人口增加に關する法則を表明するに至れるものに、伊太利亞ピィエーモンテの人ヂオヴアンニイ・ボテロ（Giovanni Botero）あり。彼れの所論は一千五百八十九年初めてヴェネチアに於いて出版せられたる其の Della Ragione di Stato, libri x. に附加せられたる Delle Cause della Grandezza delle Città. 中に看出さる。彼れの意見に據れば、人口は暫く增加の勢を續くるも、一定の限度に到達せる後は、同一の割合を以つて增加を持續すること能はざるのみならず、其の增加の勢を停止し若しくは減少することすらあり得るなり。彼れは人口の增加を防ぐ原因を、唯り戰爭、惡疫、飢饉、其の他之れに類するものゝみに求むるを以つて誤謬なりと主張す。蓋し僅少の人口を以つて出發せる諸都市は何れも這個惡疫、戰爭、飢饉等の障害を受けたるに拘らず、莫大なる人口數に到達せるものなるが故なり。人口を制限する究竟の原因は生活資料の制限なり。生殖力（virtus generativa）は榮養力（virtus nutritiva）よりも强大にして、之れと衝突するものなり。（ibid, libro iii, ed. 1628, pp. 73 et seq.）。生殖力は太初に於けると等しく强大なり。吾人は今に於いてもダビテ若しくはモーセの時代に於けると等しく、生殖の力あるものなり。而も自然の榮養力は制限せられて、不斷に增加しつゝある人口に對して生活資料を供給することを得ず（斯くして定められたる限度は一定せるものに非ざるも）。限定せられたる生活資料の供給は亦人民の增加に對して限度を置くの事實なかりせば、現存の人口に對する增加は極りなく、凡ゆる都市及び國家は無限に增大す可きなり。若し這般の增大にして持續せずとせば、汗は榮養物及び生活支持の資料の缺乏に基くものたらざる可らず。而して榮養物は田舍若しくは外國の何れかより招來せらるゝ所にして、其の都市にして發達を持續するとせば、食物は遠隔の地より之れに齎されざるを得ず。「羅馬の極盛時に於いても、人間の生殖力は之れが羅馬發祥の當時に於いて存したる所と毫も異なることなきも、而も其の人民は割合に增大することなかりき。此の

都市の榮養力は更らに其れ以上に進歩すること能ず。斯くて時の經過する間に、其の住民は更らに大なる食物の供給を得ること能はざるが故に、結婚を行はざるか、若しくは、彼れ等が結婚するとするも、其の子女は、彼れ等が快樂を享くること少なきか、又は現實の窮乏裡に在ることを見、而して更らに大なる幸運を求めて國外に赴けり。羅馬人は斯くの如き事態に備ふるが爲めに、最貧困なる市民を選んで、移植せられたる樹木の如く、彼れ等が其の境遇を改善し、更らに大なる快樂を享有し、斯くて又繁殖するを得可き植民地に彼れ等を送れり」。「同一の理由に基き、人類は既に一定多數に膨脹して、之れを超えて增加することなかりき。而して大地の果實と食物の供給とは人民の更らに大なる數を許すことなきが故に、三千年若しくは其の以上の間、此の世界は恰も現在に於けると等しく人間を以つて充滿しつゝありしなり」。(ibid., p. 359-365.)。

凡そ此の世界に於いて、生活資料に對する大鬪爭の如く競爭と戰爭と流血とを來さしむるものなし。新大陸土民の食人、ギニィの奴隷賣買、亞剌比亞人及び韃靼人の强奪、ゴール、チュートン、其の他諸民族の大移住、長期に亙れる戰慄す可き戰爭、盡くの期なき訴訟沙汰――是れ等のものは、總べて皆、結局に於いて生活資料の制限に基くものなり。然れば生活資料の制限は人口に對する第一次的の抑制にして、土壤の磽确、氣候の不良、疾病及び惡疫は第二次的ものなり。植民地は母國の人口を減少せしむるものに非ず。蓋し移住民によりて生じたる空所は、直ちに生殖力の作用によりて滿たさるゝが故なり。然もボテロは時代の思潮と一致して、出來得る限り人民を夥多ならしむるを以つて其の國家の利益と觀る。彼れは結婚を奬勵するの法律を制定せんことを欲するも、多產に對して賞金を提供することを欲せず。政府は著しく年齡の相違せる結婚を許す可きものに非ず。蓋し斯くの如きは出產を大ならしむるに資するものに非ざるが故なり。人口は出產數の增加、嬰兒の保護及び生命の延長によりて其の可能なる限り增加す。最後に彼れは貧民に對する有效なる公援助の制度を提唱せり。(ibid., libro iii.)。

英國に於いては第十六世紀末より第十七世紀初に亙り、一方に於いては宗教階級の妻帶、國家の安定が人口增加を招徠すると共に、他方には牧場の增加、僧院的生產組織の崩壞に基く勞働に對する需要減少によりて、識者の間には却つて人口過

多を憂慮するの念をすら生じたり。フランシス・ベーコン(Francis Bacon)は謂らく「一國の人口は彼れ等を支持す可き其の國の資源を超過することなし」と。而して當時の識者は主として人口過多の危險を除去するを論據として其の植民地の計畫を提唱せるなり。斯くてサー・ウォター・ラリ(Sir Walter Raleigh)はボーダン(Jean Bodin)等の如く、古羅馬の結婚法を模範として、結婚の奬勵によりて人口の增加を企圖するの策を主張することなく、其の死後一千七百〇二年彼れの曾孫(Ph. Raleigh)によりて出版せられたる Three Discourses. I. Of a war with Spain. II. Of the cause of war. III. Of ecclesiastical Power. 中に於いて「或る國が其の上に生活する庶民によつて覆はれたる時は、其の國をして自ら負擔を免れ、而して正當若しくは不正當に其の重荷を他に課するの已むなきに至らしむる自然的必要存するなり、蓋し屢々、狹き場所に密集して生活する者を襲ひつゝある疫癘の危險は姑く之れを措くも、如何なる災禍と雖も、飢餓の苛責と脅威の如く烈しく人々を驅つて懸命の行動に出で、しめ、死を輕んずるに至らしむるもの存せざるが故なり」と主張しつゝあるを見るなり。(Sir Walter Raleigh's Miscellaneous Works, to which is prefixed a new account of his life by Tho. Birch, 1751, vol, II, p. 25; cf., Bacon, Sermones fid., 15, 33; De colonis in Hibernian deducendis.)。而してヴァヂニアの植民地に於いて更らに多くの勞作者を必要とせるヴァヂニア會社は一千六百十六年、當路の大臣に上書して、ヴァヂニアは充滿せる英國の民衆を放出す可き絕好の國土なりと說けり。(P. A. Bruce, Economic History of Virginia, vol. I, 1896, p. 60.)。

而してトーマス・ホッブズ(Thomas Hobbes)は、人口增加して土地の狹小を感ずるに非ざれば、戰爭の要なきものと思惟せり。(ut non videatur, nisi de loco, crescente scilicet hominum multitudine, unquam pugnandum esse — Elementa Philosophica de Cive, 1647, Epistola Dedicatoria.)。而して彼れは、若し國內に於ける人口數過多なるに至らば、之れに比して人口稀薄なる地に之れを移植せしむ可く、そは先住民の滅絕を來すことなくして却つて其の土地の更らに良好なる耕作を來さしむ可きものと思惟せり。而も彼れは結局此の世界が其の住民を給養するが爲めに狹隘に過ぐるに至らば、戰爭を措きて、他に手段なきものと觀たり。(De Cive, I, §§ 12, 15, et passim; Leviathan, 165-1, p. 181.)。

五

然るに歐洲列强の間に於ける爭覇戰次第に激甚と爲るに及んで、人口增加を欲するの念再び熾烈と爲ると共に、國富の父にして發動的原質たる人民に對して精細なる統計的研究を行はんとする「政治算術家」を出すに至れり。而して人口統計の研究に於いて先驅者たりしものは實にジョン・グラント（Capitain John Graunt）なり。（昭和四年版拙著「經濟學前史」六九一―六九六頁參照）。

グラントのNatural and Political Observations mentioned in a following Index and made upon the Bills of Mortality, with reference to the Government, Religion, Trade, Growth, Air, Diseases and the several Changes of the said City. は初め一千六百六十二年 John Graunt, Citizen of London. の署名を以つて出版せられたるものなるが、ジョン・イヴェリン（John Evelyn）ジョン・オーブリイ（John Aubrey）エドマンド・ハリイ（Edmund Halley）及びバァネット僧正（Bishop Burnet）等が一代の大經濟論者にしてグラントの親友たるサー・ウイリアム・ペチイ（Sir William Petty）を以つて其の眞著者と看做したるが爲めに、後の諸家の間に此の書の眞著者がグラントなりやペチイなりやの問題を惹起するに至りたるも、恐らく本書はグラントの手に成りしものなる可し。然も兩者の交情密なりしより案ずるに、ペチイが本書の著者に對して些少ならざる影響を及ぼしたる事は疑ひなき所なる可し。（Political Science Quarterly, xi, pp. 105-132. 所載チャールズ・ヘンリイ・ハル（Charles Henry Hull）の The Authorship of the Natural and Political Observations upon the Bills of Mortality. 並びに The Economic Writings of Sir William Petty together with the Obserbations upon The Bills of Mortality more probably by Captain John Graunt, vol. I, pp. xxxix-lix. 及び Some Unpublished Writings of Sir William Petty, edited from the Bowood Papers by the Marquis of Lansdowne, vol. I, 1927, pp. xii. を參照す可し。カムエル博士（John Campbell）は Biographia Britannica, IV. pp. 2262-2263. に於いて、グラントの死後二年にして現れたる一千六百七十六年の增補新刊はペチイの監修の下に公にせられたるものなりと云へり。ペチイは一千六百八十一年を以つて起草せられ、同八十三年に出版せられたる彼れ自身の Observations upon the Dublin-Bills of Mortality, MDCL XXXXI. and the State of that City. に署して By the Observator on the London Bills of Mortality. と稱し、而して其の劈頭に於いて曰く「倫敦死亡表」に就いての解說は世界

に新たなる光明を與へたるものなりき、而してダブリンの其れに對する同樣の解說は此の蠟燭をして一層其の光輝を明かならしむ可き燭剪（しんきり）として役つを得可きかと」（ibid. p. 1.）。

然れどもペチイは倫敦が巴里及びルーアンの兩市を併せたるよりも以上の人口及び戸數を有し、他の諸點に於いても亦、一層敬重す可きものなることを立證するを誇りとせるに反し（Two Essays in Political Arithmetick, concerning the People, Housing, Hospitals, &c. of London and Paris, 1687, p. 1.）、グラントは ロバアート卿に對する一千六百六十二年一月二十五日附獻本の辭に於いて「英國の首府、倫敦」を以つて恐らく身體に比して餘りに大に、或ひは又、餘りに逞しき頭部なりと做し、そが其の屬する身體に比して三倍も速かに成長することを認めたり。（Natural and Political Observations, 1662, p. ii.）。而して倫敦の過度の膨脹に對する不安と戰爭及び疫癘に由る人口減退の憂慮とは彼れをして倫敦市の現狀に對する正確なる研究を欲求せしめたるなり。

巴里が一千六百六十七年を以つて死亡表を公にするに至りしは恐らくグラントの著書の影響に由るものなる可し。而してそは又グラントをして倫敦及び巴里を比較することを得せしめたり。（cf., Some further Observations of Major John Graunt, added to the Fifth Edition of Natural and Political Observations, 1676.）。グラントの著書は其の初版の現れたると同じき一千六百六十二年に再版を出し、次いで六十五年に第三版並びに第四版、七十六年に增補第五版の刊行を見、而して一千七百〇二年にはブレスラウのシュルッ博士（Dr Gottfried Schultz）によりて Natürliche und politische Anmerkungen über die Todten-Zettul der stadt London. 云々と題して獨譯せられ、ライプチッヒに於いて出版せられたり。

グラントの道を進めるサー・ウイリアム・ペチイの人口學說は前揭拙著六九六―六九九頁中に於いて紹介せる所の如し。

サー・マシュー・ヘール（Sir Matthew Hale）亦種々なる計算を基礎として、人口の增加は幾何學的割合に於いて生ずるの傾向あるものにして、人口は三十五年內に二倍と爲ることを得可きものと推論す。然れども斯くの如き增加の割合を以つてすれば、人民の數は久しき以前に於いて生活資料によつて設けられたる限度を踰

越せる筈なるが故に、彼れは事實比較的少數なる人口狀態を以つて、飢饉、戰役、洪水、惡疫、及び地震の如き一定の抑制の作用に基くものなりと說明す。而も斯くの如き抑制の行はれたるに拘らず、人口は現在に於いて增加し、又將來に於いて增加す可きものなりと彼れは云ふ。而して彼れは前揭グラントの小冊子 Observations upon the Bills of Mortality. に據りて人口は永遠に不變なるものに非ずして、常に增加しつゝあるものなりと做す自己の所論を確證す。「而して或る人をして單に四五十年の期間內に於ける倫敦の膨脹を考察せしめよ、吾人は余の手に置かれたる諸解說に從つて這般の歲月中に於いて最近の火災（一千六百六十六年）までに、市內の敎區は九より十に、即ち十分の一方增加し、又、市外の敎區は同一の歲月中に七より十二に增加し、而も尙ほ國內の爾餘の部分に於いて何等の減少若しくは衰微を來さしむることなきを看出すなる可し」。（Primitive Origination of Mankind, 1677.）。

次いでサー・ジョサイア・チャイルド（Sir Josiah Child）は人口が常に商工業と均衡を保つことを認め、人間の不足は賃銀を昂騰せしめ、賃銀の昂騰は幾許ならずして人口稠密の度を進むるものと說けり。彼れは其の書中に於いて「相當なる人口を有せざる土地は（縱令ひ其の地質如何に優秀なるも）如何なる國家をも富裕ならしむることなかる可し」「一國の人民を減退せしむるに資するものは總べて一國を衰壞せしむるに資するものなり」「大多數の文明國は其の人民の寡少若しくは夥多に比例して貧富の程度を異にするものにして、其の土地の磽确若しくは豐饒に依るものに非ず」と主張し、（A Discourse about Trade, 1690, p. 165.）、而して英國內の人民は同國の外國植民に由りて著しく減少せりと做すの所論に反對するの條下に於いて「死亡表解說の聰明なる著者キャプテン・グラント」の所說を引用せり。（ibid., p. 173.）。

グラントの著書に比して、時代の注意を惹くこと尠少なりしと雖も、將來の計算者に對して一個の典型として役立つ可き人口學上の一貢獻はハレー慧星の發見者たる有名なる星學者エドマンド・ハリイ（Edmund Halley）によりて行はれたり。彼れが一千六百九十三年王立協會に於いて朗讀し、同年 Philosophical transactions of the Royal Society, No. 196. 中に公表せられたるものに An Estimate of the Degrees of the Mortality of Mankind drawn from curious Tables of the Births and Funerals at the City of Breslau, with an attempt to ascertain the Price of Annuities upon Lives. あり。此の報告は Assurance

Magazine. の第十八卷中に再刻せられたり。

ハリイは、人類の死亡率に就いての考察は輓近ウィリアム・ペチイ及びジョン・グラントによりて行はれたる所なるが、而も彼れを以つて觀れば、是れ等倫敦及びダブリンの死亡表より引かれたる推斷は其の著者に對してすら不完全なるの觀あるものと做せり。即ち第一は、其の中には人民の數の缺如しつゝあること、第二に、人民の死亡年齡が知られざること、最後に、兩市に於いては葬儀が著しく出生を超過せるの事實によりて窺知し得るが如く、異鄕民が時々多數に來住して是れ等兩市内に於いて死去するが爲めに倫敦及びダブリンは之れをして斯くの如き目的に對する標準たらしむるを得ざること是れなり。然るに這般の缺點は最近ユステル(Justell)によりて王立協會に交付せられたるブレスラウ市に於ける死亡表によりて著しく補充せられたるの觀あり。即ち是れ等の表中には、死亡せる總べての者の年齡及び性が毎月記述せられて、一千六百八十七年より九十一年に至る最近五ヶ年の出生數と比較せらるゝなり。ブレスラウは深く内地に入り込めるオーダア河畔の市にして、リンネル工業に從事せる凡そ三萬四千の定着せる人口を有し、人民の流出入殆んどなきものなり。ハリイは市勢調査の存せざることを遺憾とするも、而も死亡に對する出生の超過に由りて其の數を推定せり。彼れは僅かに五ヶ年間の記錄を有するに過ぎざることを遺憾とし、英國のクライスト・チャチ・ホスピタル(Christ Church Hospital.)即ち「青衣學校」(Bluecoat School)に於ける經驗を以つて少くとも一の補正たらしめ得可きものと觀たり。同校學生の年齡は十四より十七に至るものなるが故に、年々凡そ百分の一の青年が死亡するものと觀たり。彼れ曰く「是れ等の考察よりして余は下の表を構成せり、而して其の用途は多方面に亙れるものにして、人類の狀態及び情況に關し余の知れる今日猶ほ殘存する如何なるものにも優りて正しき觀念を與ふるものなり。そはブレスラウ市に於ける誕生より極めて老齡に至るあらゆる年齡の人民の數を示し、斯くて又、總べての年齡に於ける死亡の蓋然性を示し、而して又從來は單に想像的評價によりて行はれたるに過ぎざる終身定期金の價値に就いて一定の見積を行ふの方法を敎へ、又申込まれたる或る年齡の人が或る他の一定年齡まで生活するの蓋然性、其の他多くのものを示す」と。(Miscellanea Curiosa, 1705, pp. 282ff, quoted by James Bonar,

Theories of Population from Raleigh to Arthur Young, 1931, pp. 114-116.)。尙ほ曰く「既述せる所のものに據りて生命保險の掛金の比例は須らく調整せらる可きものにして、又、二十才と五十才の生命を保險する掛金の比例の間の相違は發見せらる可きものなり。例へば、二十才の人が一ヶ年内に死亡せざるは一に對する百なるも、而も五十才の人に取りては一に對する三十八に過ぎず」と。(Miscellanea, pp. 289-290; Bonar, p. 116.)。「終身定期金の評價は之れに依賴す、蓋し其の取得者は當然彼れが其の生存しつゝあるの蓋然性を有する其の定期金の價値の一部に對して、支拂ふ可きものなるが故なり。而してこは須らく年々測定せらる可きものにして、總べて是れ等年々の價値が寄せ合されたる總額が申込まれたる人の終身定期金の價値に相當するなる可し」。而して各地が健康に適する點に於いて相異れるの事實は這般の提案をして普遍的ならしむることを妨ぐると稱して反對するもの存す可く、而して斯くの如きは拒否し難き所なりと雖も、而もハリイは、死亡する者の數が三萬四千人中一千百七十四なるによりて、彼のペチイが倫敦に就きて測定せるが如く、凡そ三十分の一が年々死亡するものと觀る可く、而して幼年期に於いて死亡する者の數は彼此の空氣が健康に適する程度に於いてさまで大なる相違あるものに非ざるとを好く論證するものと思惟せり。(Miscellanea, pp. 299-300; Bonar, pp. 116-117.)。

ハリイが其の報告を王立協會に致す二十二年前和蘭の政治家デ・ヴィット (Johan de Witt) は一千六百七十一年を以つて現れたる Waardije van lyfrente in proportie tot losrente. に關する小冊子中に於いて終身定期金に對して科學的基礎を與へんとせり。彼れは佛人によりて其の國土が蹂躙せられ、貨幣を必要とすること痛切なるの秋に當り、終身定期金の交付によりて之れを調達せんことを切望せり。即ち彼れは六歩四分の一の支拂を行ふも、猶ほ之れを以つて四歩の普通の公債よりも國家に取りて有利なるものと觀たるが故なり。從來終身定期金は餘りに甚しく無造作なる條件を以つて授與せられ、少年と老年とは殆んど區別せられざりき。ヴイットは之れを改めて國家に取りて更らに有利なるものたらしめんとせり。彼れは彼れの提案が其の國人に强烈なる貯蓄心を與ふ可きを信じ、其の提案の結果として國民的資本の減少を憂ふることなかりき。而して終身定期金の急速なる償却は普通の公債に比する時は國家に取りて有利なり。彼れの計算は第三年

より始めて更らに五十年間生くるの機會は一に對する一、五十三才に於いては猶ほ十年生くるの機會は一に對する三分の二、六十三才に於いては一に對する二分の一、七十三才に於いては更らに七年生くるの機會は一に對する三分の一、而して八十才に於いては死の機會は一に對する一なりと云ふ假設に基礎を有するものなり。

尙ほ當時に於ける政治算術家の所論にして人口學說に對する貢獻として擧ぐ可きものはチャアルズ・ダヴェナントの其れなり。而も吾人は彼れの所說に關しては既に前揭の拙著中に於いて之れを一言せるを以つて爰に之れを再說せず。（同書七〇二—七〇三頁參照）。

吾人は又、神の、攝理に依りて、總べての動物の增加と其の生命の長さとの間に驚く可き均齊と正しき比例の存することを信ずるの意見をウィザアの僧侶にして自然哲學者なるウィリアム・ダァアム（William Derham）の Physico-theology, or a Demonstration of the Being and Attributes of God from His Works of Creation, 1713. 中に看出す。

此の世界が可なりによく人民を以つて充たされたる時、著しく長命の必要なきに至り、人間の普通の年齡は先づ百二十に下り、次いで七十に減ず。「是れに由りて、人民を以つて住はしめられたる世界は相應の點に止まり、充滿に過ぐることも、又、空虛に過ぐることもなきなり」。古の長命にして持續せんか、「此の世界は餘りに人口過多と爲りしなる可く、若し又、人間の年齡が他の諸動物の其れと等しく、僅かに十年、二十年又は三十年に限られたりとせば、人類の衰頹は餘りに急速なりしなる可し」。這般の事項に關する英國の最良の記述に據りて、此の國に於いて、又、全世界を通じて、人類の繁殖には一定の割合及び比率存くるの觀あり。あらゆる國、州若しくは敎區に於ける人數に比例して一定數は結婚し、一定數は生れ、一定數は死す。而して彼れは其の所論を確保するが爲めにグラント、キング及びダヴェナントを自由に引用せり。彼れはグラントが男子の出生十四に對し女子の其れを十三と見積り、一夫多妻に反對せるに滿足せり。（Bonar, Theories of Population, op. cit., pp. 136-144.）。

人口が幸福と安固と富强とを助成するものにして、民衆の幸福が彼れ等の數に比例するの故を以つて、人口增加を奬勵するを爲政家の義務と做せるヨハン・ペー

ター・ジュスミルヒ（Johann Peter Süssmilch）亦其の主著 Die Göttliche Ordnung in der Veränderungen des menschlichen Geschlechts, das ist gründlicher Beweis der Göttlichen Vorsehung und Vorsorge für das menschliche Geschlecht aus der Vergleichung der Geborenen und Gestorbenen, der Verheiratheten und Geborenen wie auch insonderheit aus dem beständigen Verhältniss der geborenen Knaben und Mädchen u. s. f.——本書は一千七百四十—四十一年（恐らくは又四十二年）に出版せられ、再版は Die Göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts aus der Geburt, dem Tode, und der Fortpflanzung desselben erwiesen. の題下に一千七百六十一—二年に現れ、爾後幾度か其の版を重ねたり——に於いて、グラントを稱讃して曰く「發見は亞米利加の其れの如く常に可能なりしも、而もそは古き有りふれたる眞理に對する其の省察に於いて他の人々よりも更らに遠く進める一人のコロンブスを要求せり。斯くて倫敦に於ける死亡及び疾病の記錄中に一の秩序を認め、而して是れに由つて導かれて人間生活の他の部分に於いても同樣の秩序存せざる可らずと做す適切なる結論に到達せる最初の人たるに至れるものはグラントなり。洵に彼れは「神的秩序を發見せるコロンブス」（Columbus der göttlichen Ordnung）なり」と。而してジュスミルヒはグラントを隔つる八十年の後に出でゝ、あらゆる彼れの後繼者の研究の結果を利用するを得たり。彼れはハリイを尊重せるも、而もプレスラウは彼れの思惟せるが如く、爾く單純なる標本に非ず、又、グラントが三十年間の數字を有したるに對し、ハリイは僅かに五ヶ年間の其れを利用し得たるに過ぎざることを指摘せり。而して彼れ自身はブランデンブルグ並びに一般獨逸の統計を使用し、和蘭に關してはケルセボオム（Willen Kerseboom）及びズトルイク（Struyck）、瑞典に關してはワルゲンチン（P. V. Wargentin）に依賴せり。デ・ヴイットに關しては何等の讃評なく、終身定期金、トンチ年金等に關しては說く所尠少なり。彼れはユスチ（Johann Heinrich Gottlob von Justi）が都市の死亡率を以つて地方の其れよりも低しと主張せるに對し、地方の死亡率の低きことを立證せり。（Bonar, Theories of Population, op. cit., pp. 144-152; Wilhelm Roscher, Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland, 1874, S. 421-425.）。

六

然れども斯くの如き間に於いて漸次發達し來りたるものは、統治者は國家を富

强ならしむるが爲めに個人の幸福を犧牲たらしむるの權利なしと做すの感情なり。

リチャード・カンチロン（Richard Cantillon）は其の Essai sur la Nature du Commerce en Général. に於いて、人口の生活資料に依賴するを認め、而して「貧困にして扶持せらるゝこと惡しき住民の大多數を有すると、數に於いて劣るも、著しく有福なるものを有すると、換言すれば、六アルパンの產物を消費しつゝある一百萬の住民を有すると、一アルパン半の其れに生活する四百萬を有すると孰れを優れりとするや」の疑問を提出せり。（Essai sur la Nature du Commerce en général, 1755; p. 113.）。

而して人口過多、食料缺乏の脅威によりて人間は無窮の改善に向つて進むことを得ざるものには非ざるかの問題は一部の思索家の心胸に湧けり。ロバート・ウルレス（Robert Wallace）は其の Various Prospects of Mankind, Nature and Providence, 1761. に於いて、人間社會の諸缺陷と其の發生する泉源の概觀を與へたる後、モーアの「ユートピア」の如く、單に唯一國民に對してのみならず、全世界に對する完全なる政治の典型を示し、而して更らに良好なる平等と更らに良好なる富の分配とを包含する上述の典型に則れる政府は果して此の世界に樹立せられ維持せられ得可きものなるや否やを疑問とせり。而して彼れは、人口は不平等が再現し、困苦が再襲するまで增加す可きことを看出せり。「完全なる統治の下に於いては、家族を有するの不便は全然除去せらる可く、兒童は充分に保護せらる可く、而して一切のものは人口をして大ならしむるに好都合と爲り、特殊の氣候に於ける一定の不健康なる季節若しくは恐る可き疫癘は多數の人命を亡ぼすことある可きも、而も概して人類は異常の增加を來し、世界は終に人口過多と爲り、其の夥しき住民を支持し得ざるに至る」。（ibid., p. 114.）。ワルラスは大地の沃度が不斷に增大せられ得るか、然らざれば或る熱心家等が仙丹より期待せる所のものゝ如く、或る自然の神秘により て玄妙科學（occult sciences）に熟達せる或る賢明なる士が全然現在に於いて知らるゝ如何なるものとも相違せる人類支持の方法を發明するに非ざれば、此の世界が長へに其の住民に榮養を供給すること能はざる可きは明白なる事實なりと思惟せり。（ibid., p. 115.）。而して增加して止まざる人口を支持する一定方法にして案出せられたりとするも、猶ほ空間の缺乏によりて、地球の表面に人民の集團を收容

す可き限界存するなる可し。彼れは動物の身體が食物なくして支持せられ得ざるの事實を以つて疑ふ可らざるものと思惟し、而して大地の沃度に限界の置かれたること、並びに其の大部分は是れまで知られたる限りに於いては、常に同樣の狀態を持續し、恐らく太陽系統に著しき變化を來さしむるに非ざれば、甚しく變更せらるゝこと能はざるを以つて等しく確實なる事實と看做せり。斯くて此の地球は終には人口過多と爲る可く、而して斯くの如き空想的諸計畫の最大なる嘆美者は、是れ等のものが其の存在せざる可らざる地球の限界と全然相容れざるが故に、其の終滅するに至る可き避け難き時期を豫見せざるを得ず。斯くて彼れは、完全なる國家を以つて、人間の欲情及び熱望と相容るゝも、大體に於いて、地球上に於ける人類の環境と相容れざるものと觀たり。(ibid., p. 116.)。而して彼れは、破局の到來を以つて急激なる可しと想像せり。彼れは破局を防止するが爲めには、結婚の抑制、僧侶及び其の他の者の獨身、庶子、嬰兒殺し、及び食糧の多寡と共に變じつゝある一定年齡に到達せる人々を剿絕することを除きては、何等の手段をも想像することと能はざりき。「人類は斷じて這般の制規に同意することなかる可し。武力と兵器とは終に彼れ等の爭鬪を決定せざる可らず、而して戰場に於いて斃るゝ者の如き、人々の死は生殘者に對して充分なる食糧を殘し、而して生れ出づ可き他の者に對して餘地を作るなり」。(ibid., p. 119.)。

後年マルサスは、彼れの呈示す可き最重要なる議論が確かに新たなるものに非ざることを告げ、而してそがソルラス氏によりて開陳せられ、本問題に適用せられたることを認めたり。而も彼れはソルラスが之れを其の適當なる重味を以つて、若しくは最も有效なる見地に於いて行はざりしものと做せり。(An Essay on the Principle of Population, as it affects the Future Improvement of Society, 1798, p. 8.)。

七

猶ほ當時一部の學者の間に問題と爲れるものは古代民の人口が果して大なりしや否やの點なり。夙にアイサック・ヴォシアス(Isaac Vossius)は其の一千六百八十五年の著 Variarum Observationum Liber. に於いて、帝政羅馬市の人口を以つて一千四百萬と看做し、當時の歐洲全般の人口を以つて僅かに三千萬に過ぎざるものと觀、其の中大不列顛及び愛蘭の其れを僅々二百萬と見積れり。倫理哲學者リチャ

ード・カムバアランド（Richard Cumberland）は其の遺著 Origines Gentium Antiquissimae, or Attempts at Discovering the First Planting of Nations, 1742. に於いて同一の問題を取扱へり。又、シャール・モンテスキーは、現在地球の表面には、曾つてジュリアス・ケーザルの時代に存したる人類の五十分の一も存することなしと稱せり。(Lettres Persanes, 1721, lettre cviii; cf., L'Esprit des Lois, 1748-9, liv. xxiii, chap. 17, 18, 19.)。而して前掲ロバート・ワルレスは凡そ一千七百五十年の頃、エヂンバロオ哲學協會に於いて Dissertation on the Numbers of Mankind in Ancient and in Modern Times. を報告せり。デヴィッド・ヒュームは是れに由りて這般の問題に對する興味を喚起せられて其の Political Discourses, 1752. の第十論文として Of the Populousness of ancient Nations. を執筆するに至れり。(ibid., pp. 155-261.)。

ヒュームは、縱令ひ、古代人が現代人を惱しめつゝある痘瘡、黑死病等に惱ましめらるゝことなかりしとするも、彼れ等の家事經濟と現代人の共れとは奴隸制度の存否に於いて相違し、古代の國家は殆んど不斷に戰爭を行ひ、其の戰役は現代の其れに比して遙かに破壞的にして、又、其の會戰は遙かに殺伐に、古代の社會狀態は啻だに戰時のみならず、平時に於いても亦、人口の增加に取りて不利なるものあるのみならず、古代に於いては商工業の如きも歐洲の何地に在りても現代に於けるが如くに隆盛なるを得ず、多數の人民を生存せしむるが爲めに主要なる產業たる農業を奬勵す可き最も自然なる方法は先づ他種の產業を刺激し、是れに由つて勞働者をして其の貨物を即時に販賣するを得せしめ、而して彼れの快感と享樂とに資するを得可き財貨を取得せしむるに存するも、而も斯くの如きは古代の國家よりも現代の其れに於いて多く行はるゝ所なるが故に、此の世界の人口は現代に於けるよりも古代に於いて大なりしものと推定するは不可能なるの觀あるものと思惟せり。「古代人の間に於ける財產の平等、彼れ等の國家の自由及び分裂は洵に人類の蕃殖に資するも、而も彼れ等の戰役は更らに慘虐にして破壞的に、彼れ等の政府は更らに朋黨的にして變動し易く、商工業は更らに脆弱遲鈍に、而して一般警察行政は更らに弛緩亂雜なりき。是れ等後の不利益は前の利益に對して十分なる對衡力を形成するの觀あるものにして、寧ろ此の問題に關して普通に行はるゝ所のものに對する反對の意見をして有利ならしむるが如し」。(ibid., pp. 210-211.)。人

口狀態に影響する事情は固より多しと雖も「而も若し凡ゆる他の事物にして同一なりとせば、苟も最も多くの幸福及び善德と最賢明なる制度の存する所に於いては、又最も多くの人民の存す可きことを期待するは當然なるが如し」。(ibid., p. 160.)。

ヒュームは這般の論述を行ふに當り、殆んど全く人命統計を利用することなく、又、古代の歷史家は現代の其れに比して公平なるも、而も不正確にして、各個の事實及び數字は之れを得ること困難なるが故に、明白なる一般的原因に訴へたり。

然るにロバート・ワルレスは彼れが哲學協會に於いて報告せる前掲の論文に附錄を加へ、一千七百五十三年 A Dissertation on the Numbers of Mankind in ancient and modern times, in which the superior populousness of Antiquity is maintained. With an Appendix containing Additional Observations on the same subject and some remarks on Mr. Hume's Political Discourse of the Populousness of Ancient Nations. と題して出版し、前掲ヒュームの論文に反對して、此の世界は現代に於けるよりも古代に於いて人口夥多なりしことを主張し、數字を擧げて人口の增加が單に人類の生殖力のみに依賴するとせば、其の發達が如何に驚く可く急速なるかを例證す可き計表を挿入せり。彼れは生殖力及び死亡率に關して穩當なる假定と思惟する所のものに基き、人口は三十三年三分の一毎に倍加し得るものにして、斯くて一千二百三十三年の終に於いては、そは二人より四一二、三一六、八六〇、四一六人、即ち極地を除ける陸地の各エーカー毎に約十三人にまで增加するを得可く、而して人類の過誤及び惡習と政治及び敎育の缺陷に由るに非ざれば、此の地球は既に遙かに多くの人民を有す可き筈にして、恐らくは幾多の年代以前に於いて既に人口過多と爲りしなる可しと論ぜり。(ibid., pp. 1-13.)。而して本著中に於いて過去を研究せるワルレスは其の第二著前掲 Various Prospects. に於いて將來を論ぜんとせるなり。然るにジュスミルヒは彼れの時代に於けるよりも、ケーザルの時代に在りては六七百萬方人口少しと思惟し、ヒュームが自己と全然同意見なることを欣べり。

此の時代は又、英國の人口を以つて減退しつゝありと做す陰慘たる意見を表明する者を出せり。ニューカッスルの聖ニコラス寺院の牧師ジョン・ブラウン (John Brown) は其の An Estimate of the Manners and Principles of the Times, 1757. に於いて、商業は其の最初及び中間の階段に於いては善を行ふものなるも、其の最後の階段に於

いては危險にして破壞的なるを主張し、而してそは利己、奢侈及び信仰の缺乏に對して責を負ふ可きものにして、又、貨幣の流出を來さしむると機械の發明とに由りて人口を減少せしむるものと做せり。「此の異常なる富の程度によりて誘起せらるゝ浮華懦弱は結婚欲を減じ、第二に貿易の此の時代が當然大都市に於ける下層階級の間に生ぜしむる不節制及び疾病は或る程度に於いて蕃殖の不能を來さしめ、第三に、常に斯くの如き虛弱に伴ひて親子共に短命と爲り、斯くて又、全體に於いて猶ほ一層の人口減少を來さしむるなり。事實は斯くの如き推理を確證し、又、凡ゆる人の觀察に委せられつゝあるなり。最初の耕作及び家庭製品の增加以來、住民の增加は英國に於いて大なるものありき。對外商業の大增進以來人數の增加は殆んど認むることを得ず。否、其の貿易は恐らく二倍と爲れるに拘らず、全體に於いて此の國は五十年以前に比し人口少なしと信ず可き大なる理由存す。洵に或る貿易都市は人口を增加せりと雖も、而も他のものは商業の變遷によりて人口稀薄と爲れり。首府は其の廣袤に於いて膨脹せるが如きも、而も其の人口數の減少せることは最も正確なる計算に據つて明かなるに似たり。而して英國中の村落に關しては、概して人口增加の勢を停止し、而して其の多くは此の世紀の初頭に於けるよりも住民稀薄と爲れるものと信ず可き大なる理由存す。一般的調査及び比較を有せずして本事項に關し確實を得ること難し。然れども、余の取調べたる一定地方教區の記錄簿によりて、一千五百五十年より一千七百十年に亙り、住民の數は徐々に增加し、其の兩極端は相互に七十二に對する五に相當せるが、一千七百十年より現時に至るまで、人口數は敢て減少することなかりしとするも、停止の狀態に在りしが如し」。(ibid., pp. 151, 185, 186-9.)。

次いで非國教の牧師リチャード・プライス(Richard Price)は一千七百六十九年に初版を出せる其の Observations on Reversionary Payments; on Schemes for providing Annuities for Widows, and for Pensions in Old Age; on the Method of Calculating the Value of Assurances on Lives; and on the National Debt. の附錄の一に於いて「一國の强味は其の人民の數に存す」と做す舊套なる意見を固執せるも、(ibid., 5th ed., vol. 1, p. 274.)而も先づ負擔を免れしめて、而して後人口を增加す可きものと思惟せり。而して彼れの人口に關する意見は其の An Essay on the Population of England from the Revolution to the

Present Time with an Appendix containing Remarks on the Account of the Population, Trade, and Resources of the Kingdom in Mr. Eden's Letters to Lord Carlisle. 中に於いて之れを見ることを得。彼れは英國の人口が革命より彼れの時代に至るまで四分の一近く に減少し、而して其の減少の率は一千七百八十年を以つて終る二十年間に於いて 增加せることを主張せり。之れに對してウィリアム・ウェールズ(William Wales)は An Inquiry into the Present State of Population in England and Wales and the proportion which the present number of inhabitants bears to the number of former periods, 1781. に於いて、又ジョン・ハウレット(John Howlett)は An Examination of Dr. Price's Essay on the Population of England and Wales, and the Doctrine of an Increased Population established by Facts, 1781. に於いて 反對の意見を表明せり。而も是れ等の三者は孰れも人口の大を以つて國家の强 味と做すものなりき。

八

斯くの如き間に於いて次第に明かに承認せられんとしつゝありしものは人口 が生存資料に依賴するの事實なりしと雖も、他方に於いて人口增加の主たる原因 が職業に存することを認め、食料は人口と共に增加する所以を說ける者はアーサ ー・ヤング(Arthur Young)なり。

彼れは其の The Farmer's Tour through the East of England, 1771. に於いて、人口を以 つて國民的繁榮の證左と觀るの意見を排し、(ibid., p. 429.) 更らに其の Political Arithmetic, containing Observations on the Present State of Great Britain; and the Principles of her Policy in the Encouragement of Agriculture, addressed to the Œconomical Society established in Europe, 1774. に於いて人口增加の主因が業務に存することを强調せり。國富は勞 働に對する需要を增加し、勞働に對する需要は常に其の價格を引上ぐるの效果を 有せり。然れども這般の騰貴は其の商品の生產、即ち人間若しくは勞働の生產を 奬勵し、而して其の結果たる貨物の增加は其の價格を低下す。「製造業に對する需 要の增加は勞働の價格を引上ぐることなし、業務の總量一層大なるか若しくは其 の一層規律正しく行はるゝの一事は新たなる勞働者を造り出す附加的價値を供 給に與ふるが故に、そは製造業に於ける勞働者の數を增加す」。(ibid., p. 61.) 手業者 に對する需要の存する所に於いては、彼れ等は必ず充滿す。這般の需要は生存の

安易に對する別語に過ぎざるものにして、そは亞米利加の邊陲の地に於ける土地の豐富と等しき作用を爲すなり。斯くてバアミンガムが膨脹するは、凡ゆる兒童が其の手を使用するに堪ゆる年齢に達すると共に直ちに雇傭せらるゝが故に、彼れ等は毫も負擔たらざるに由るなり。職業の增加する所に於いては、人民は增加し、職業の增加せざる所に於いては人民は增加することなし。(ibid., p. 62.)。村落に就きても同一の眞理は到る處に顯然たる可し。(ibid., p. 63.)。需要にして減退することなくんば、戰爭、植民等による人口の減少は、殘存せる者の價値を實際に增加し、斯くて又、人口の增加を誘ふ。最も力强く再生產を奬勵するものは生產せらるゝものゝ價値を增加するに在り。(ibid., p. 65.)。人口稠密なる國土の特徵は何ぞ。人民多くして、而も勞働高價なるに在り。人口稀薄なる國土の特質は何ぞ。人民少なくして、勞働低廉なるに在り。「勞働は歐羅巴の如何なる部分に於けるよりも和蘭に於いて高價なり、斯くて又、同國は歐羅巴に於ける最も繁榮なる國家なり」。人口增加を奬勵すること大なるものは何ぞ。曰く、容易に所得を得るの一事なり。(ibid. p. 66.)。人口增加に對する大障害は何ぞ。曰く、所得を得るの困難なり。(ibid., p. 67.)。業務は前代に於いては大ならざりしが故に、人口亦大なるを得ざりしなり。彼れは業務にして增加せんか、人口は之れと共に增加せざるを得ずと思惟せるなり。彼れは、汝の欲するが儘に汝の人民を增加せよ、食料は彼れ等と共に增加するなる可しと思惟せり。彼れ曰く、領土の各エーカーが極限まで改良せらるゝに至るまでは、人口の增加は單に食料不足の爲めに停止することあらざる可しと。(ibid., p. 69.)。

然るに佛蘭西學者の影響を受くること多きサー・ジェームズ・スチュアートは其の大著 An Inquiry into the Principles of Political Economy, 1767. の第一編第三章に於いて人類增加の自然的並びに合理的諸因を檢討し、明確に其の增加が利用し得可き食料の增加に從ふことを說明せり。凡ゆる動物繁殖の根本的原理は生殖にして、之れに次ぐものは食物なり。生殖は生存を與へ、食物は之れを維持す。大地が自ら人間の爲めに適當なる榮養を限りなく豐富に生じたりとせば、吾人は之れを得るが爲めに勞働するの必要を毫も看出すことなりしなる可し。而して、人跡稀れなりし總べての地方に於けると等しく、人間の棲息せる總べての地方に於いて、諸動

物の狀態を調査せりとせば、是れ等のものゝ數は其の生存の爲めに、年内を通じて、規則正しく大地によつて生産せらるゝ食物の數量に比例して看出さるゝなる可し。人間に關しては、大地は自ら何等著しき程度に於いて彼れの爲めに榮養を生ずることなし。固より人間は一定種の動物と等しく他のものを食ひて生命を支ふるを得可し、而も吾人は、養ふ種族は養はるゝ種族に比し常に著しく劣らざるを得ざるの事實を認めざる可らず。斯くて大地が耕作せられざりしならんには、人類の數は大地が彼れ等の直接使用、若しくは人間の適當なる榮養たり得可き動物の直接使用の爲めに提供する自然的成果の割合を超過することなかりしなる可し。是に於いて乎、大地が何等の勞働なくして支持し得可き人類の一定數存するなり。スチュアートは、此の定數を稱して(A)と做し、而して勞働なくしては斷じて(A)は自己の爲めに勞作することなき諸動物が自然によつて彼れ等の爲めに供給せらるゝ食物の割合を越して增加し得る以上に毫も增加するを得ざるものなりと觀たり(固より彼れは(A)を決定的の數に限定せんとはせざるも)。(ibid., pp. 17-19.)。斯くして既にマルサス「人口論」出現の道は開かれつゝありしなり。

マーカンチリズムは國王及び一部の階級によりて代表せらるゝ國家の富强繁榮を增加せんとせるものなり。而して宮廷及び之れに附隨せる者が、其の豪奢なる生活と戰勝の光榮に醉はんが爲めに、人民の安寧を危からしめて顧みざりし佛國に於いては、「人は、人口の增加よりも、寧ろ國民的所得の增加を企圖す可きものなり。蓋し豐かなる所得より生ずる安易の程度比較的大なる狀態は、人口が其の所得を超過し、而して常に生存資料の緊切なる必要に驅られつゝある狀態よりも寧ろ取る可きもの」と觀るフィジオクラアトを出し、(François Quesnay, Maximes générales du Gouvernement économique d'un Royaume agricole, 1763, Maxime 26.)、而して「富者と有力者の利益の爲めに遂行せらるゝ産業」を奬勵して、貧者と窮迫者との利益の爲めに經營せらるゝものを等閑視するか、若しくは抑壓すること餘りに多きに過ぎたる英國に於いては、生産者の利益は獨り消費者の利益を增進するに必要なる可き限りに於いてのみ顧慮せらる可きを敎ふるアダム・スミスの經濟學を生み(Wealth of Nations, Bk. IV, chap. viii.)、軈がて又、其の勞働階級の狀態が次第に悲慘と爲り行くに連れて、「貧の原因」を探求せんとする經濟學者を産せざるを得ざりしなり。